

(続紙 1)

京都大学	博士 (人間・環境学)	氏名	川本 彩花
論文題目	近代音楽における芸術至上主義の形成 ——ベートーヴェンを中心とした社会学的研究——		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文の目的は、芸術至上主義が19世紀西欧社会においていかにして形成されたのかという問いを、ドイツの音楽家ベートーヴェン(1770～1827)を事例とし、当時進展しつつあった商品経済(音楽市場)およびメディア(音楽批評)との関係を軸として、歴史社会学的・知識社会学的的方法によって追求することである。芸術至上主義とは、ここでは、「芸術はそれ自体を目的に自律して存在する閉じたシステムであるとみなす芸術崇拜の立場」と定義される。ベートーヴェンを対象とするのは、音楽史研究において、芸術至上主義を標榜する音楽活動はベートーヴェンに始まったと解されており、ベートーヴェンに関する史料を分析することにより、西欧近代において音楽が芸術至上主義化してゆくプロセスを、その端緒にまでさかのぼって解明することができると考えられるからである。また、その際、ハーバーマスの文化的合理化論を理論枠組として援用することにより、本研究の理論的意義が明らかにされる。</p> <p>論文全体は、序章と終章を含む全7章から構成される。各章で明らかになった点は次のとおりである。</p> <p>第1章では、先行研究として、①芸術・音楽社会学、および②ブルデューの文化的再生産論が検討され、芸術至上主義の形成プロセスを主題とする本稿の位置づけがおこなわれる。その結果明らかになったのは、①芸術・音楽社会学は、作品分析から制度・組織・価値論へと研究の射程を拡大するなかで、芸術・音楽の「自律性」や「超越性」概念そのものを対象化する新たな視点を獲得してきたが、そうした自律性・超越性それ自体の社会的形成プロセスについては十分に明らかにされていないこと、②文化的再生産論は、文化的趣味と社会階層との関係を分析するが、その際、正統文化/大衆文化という文化の序列性・階層性そのものは自明の前提とされていること、である。それに対し本論文は、芸術・音楽の「自律性」「超越性」の表象そのものや、文化の序列性・階層性が暗黙のうちに依拠する芸術至上主義的価値体系の出現・形成のプロセスについて、歴史社会学的・知識社会学的に問いなおすことを課題とするものとして位置づけられる。</p> <p>第2章では、理論枠組として援用するハーバーマスの文化的合理化論、その背景をなすウェーバーの西洋合理主義論、およびハーバーマスによるウェーバー批判とそれに基づくコミュニケーション的行為論が検討される。その結果、ハーバーマスは(音楽を含む)芸術領域の自律化の社会的条件として、市場(商品経済)と批評(メディア)の重要性を指摘していたが、その背景には、コミュニケーション的行為論におけるシステム/生活世界という2層の社会概念が対応していることが明らかになった。このことにより、音楽市場と音楽批評という2つの領域に着目する本論文の視点が、マクロ社会学的な理論枠組の中に位置づけなおされることになる。</p> <p>第3章では、事例として取り上げるベートーヴェンについて検討される。まず、中世から現代に至る西洋音楽史を概観し、その中でのベートーヴェンの位置づけについて検討した結果明らかになったのは、次の2点である。①彼以前の音楽家が宮廷貴族によるパトロン制の時代に生きたのに対し、ベートーヴェンは、まさにそれが崩壊し始める大転換期に生きた人物であったこと、②こうしたベートーヴェンのあり方に、ハーバーマスが指摘していたように、市民的・資本主義的な芸術市場に媒介されながら自律化への階梯を上げる音楽家の姿が読み取れること、である。この2点に関しては、ベートーヴェンの個人史と、その背景をなす当時のドイツ・オーストリアの社会状況を検討することを通</p>			

じて、より具体的かつ詳細に確認された。

以上をふまえて第4章からは、芸術至上主義の出現・形成に関する分析と考察が本格的に進められる。まず第4章では、伝記と書簡を資料としてベートーヴェンの生涯とベートーヴェン自身の言説が分析され、芸術至上主義の形成の具体的諸相が、商品経済（音楽市場）の視点から検討された。その結果明らかになったのは、「芸術」とは一見相反する商品経済の浸透が、「芸術性」の発見にとって大きな役割を果たしたということ、いわば「芸術」と経済との相互補完的関係の存在である。すなわち音楽は、宮廷貴族社会から市民社会への社会構造の移行を背景に、従来のパトロン制から解放され自律化したことの代償として、商品性を帯びてきた。ところが音楽は、このように商品経済と結びつき商品化されたことで、むしろ相対的に貨幣価値には還元されえないものとしての「芸術性」が新たに発見され、芸術至上主義が主張されるようになったのである。

次に第5章では、当時の音楽雑誌におけるベートーヴェン批評の内容が分析され、芸術至上主義の形成の具体的諸相が、メディア（音楽批評）の視点から検討された。その結果明らかになったのは、本来的には音楽家と市民社会とを媒介すべきメディアが、かえって両者の乖離を拡大したという逆説的なダイナミズムである。すなわち音楽雑誌は、前述のようなパトロン制の崩壊を背景に、音楽が商品化され広く市民社会へと開放されたときに、音楽と社会とを媒介するメディアとして登場した。ところが音楽雑誌は、こうした媒介者の役割を遂行するなかで、むしろ両者の乖離を表明することによって、音楽の芸術至上主義化を推進したのである。前章での分析・考察結果と併せて、近代音楽における芸術至上主義の形成とは、商品経済の視点からもメディアの視点からも、一種の逆説を伴う現象であったことが明らかになったと総括される。

終章では、芸術至上主義の出現・形成に関する前章までの分析・考察結果と、理論枠組としてのハーバーマスの文化的合理化論とをつき合わせつつ、文化的合理化論に対する批判的再検討がおこなわれる。第2章で示されたように、ハーバーマスは文化的合理化論において、美的価値領域としての芸術の自律化のための社会的条件として、市場と批評という2つの領域に着眼していたが、それは、コミュニケーション的行為論におけるシステム／生活世界という2層の社会概念に対応していた。この理論は、（近代的な芸術が流通する市場としての）システムと、（近代的な芸術が創作・批評・享受される場としての）生活世界との相互の自律化を、文化的合理化の条件として主張するものであった。ところが、本論文において実証研究の結果明らかになったのは、市場（システム）と批評（生活世界のメディア）とが相互浸透し相互補完的なメカニズムを形成することが、むしろ近代音楽における芸術至上主義の形成に寄与したという歴史的事実であり、まさにこの点に、文化的合理化論を批判的に乗り越えるための重要な発見があると結論づけられた。

(論文審査の結果の要旨)

本博士学位申請論文は、芸術至上主義が19世紀西欧社会においていかにして形成されたのかという問いを、ドイツの音楽家ベートーヴェンを事例とし、当時進展しつつあった商品経済（音楽市場）およびメディア（音楽批評）との関係を軸として、歴史社会学的・知識社会学的方法によって追求したものである。

本論文の学術的意義は、主として下記3点にまとめることができる。

第1に、西欧近代音楽における芸術至上主義の形成という、これまで十分な社会学的研究が存在しなかった問題領域において、重要な理論的・実証的貢献をなしたという点である。

本論文内での先行研究の検討でも指摘されているとおり、芸術とくにクラシック音楽は、これまで社会学研究の対象としては、どちらかといえば周縁的な領域にとどまってきた。しかしそれは、本来的には社会学が対象とすべき領域として決して周縁的なものではなく、むしろきわめて高い重要性をもつものであると考えられる。なぜなら、かつてウェーバーが広範な比較歴史社会学的研究のなかですでに指摘していたように、クラシック音楽に代表される自律化した近代芸術は、西欧近代の合理化過程の不可欠の一環をなすものであり、その合理化過程の帰結として成立した現代社会においても、自律的な価値領域としての（音楽を含む）芸術は、依然として全体社会の重要な構成要素をなしていると考えられるからである。

ただ、芸術とりわけ音楽は、その内容の非言語性と美的自律性の高さゆえに、（美学・音楽学の対象とはされても）これまで社会学的研究の俎上に載せることが困難であった。しかし本論文は、この困難な課題に正面から挑戦し、西欧近代音楽における芸術至上主義の社会的構築というテーマに焦点を絞り、実証的な史料分析をおこないつつ、社会学の理論枠組を巧みに援用することにより、オリジナルな結論を導き出すことに成功している。まずこの点に、本論文の重要な学術的意義がある。

第2に、上述の史料分析を中心とする歴史社会学的方法において、学位申請者はきわめて高度な研究遂行能力を発揮することにより、本論文の結論を実証的に導き出すことに成功している点である。

史料として用いられたベートーヴェンの伝記・書簡集や同時代の音楽雑誌記事は、全体として膨大な量にのぼるが、それらを丹念に収集し、周到な史料批判を遂行したうえで、ドイツ語原文の緻密な読解をおこない、そこから同時代の芸術・音楽と社会・経済との関係を析出していくことに成功している。このような研究方法の着実性・堅実性という点が、評価すべき第2のポイントである。

第3に、ハーバーマスの文化的合理化論を単に理論枠組として援用するだけでなく、上述の歴史社会学的方法に基づく実証的研究を踏まえ、文化的合理化論を批判的に乗り越える可能性を理論的に示した点である。

ハーバーマスは、近代芸術に関するウェーバーやアドルノの議論を踏まえ、（芸術が流通する市場としての）システムと、（芸術が創作・批評・享受される場としての）生活世界との相互の自律化を、文化的合理化の条件と考えた。しかしながら、本論文において実証研究の結果明らかになったのは、市場（システム）と批評（生活世界のメディア）とが相互浸透し相互補完的なメカニズムを形成することが、むしろ近代音楽における芸術至上主義の形成に寄与したという歴史的事実であり、まさにこの点に、文化的合理化論を批判的に乗り越えるための重要な発見があると結論づけられた。このように、理論面においても重要なオリジナルな貢献をなした点が、評価すべき第3のポイントである。

以上のように、本論文は専門的かつ独創的な高い価値を有しているが、他方で、下記2点の課題の存在も指摘される。

第1に、本論文では、西欧近代音楽における芸術至上主義の形成プロセスを、音楽市場（経済）と音楽批評（メディア）という2つの領域との関係から、社会的に説明することに成功しているが、その2点だけで芸術至上主義の形成要因のすべてを説明できるわけではないとも考えられる。いわば、本論文は芸術至上主義の形成の必要条件を解明したものではあっても、十分条件までは論じきれていないのではないかと、ということである。

特に、クラシック音楽は19世紀のドイツを中心に発展したが、それは「遅れて来た」近代国家としてのドイツ国民国家の形成、ナショナリズムの発展と深く関わっていたと考えられ、今後の研究においては、その問題も視野に入れることが望まれる。また、ウェーバーやアドルノが重視した、音楽の形式や音楽作品の内容そのものの変化・発展と、芸術至上主義の形成・展開との関係を考察することも、特に20世紀初頭のモダニズムとの関係から、重要な論点になると考えられる。

第2に、ハーバーマスの理論枠組は、基本的には初期近代の西欧市民社会を対象とするものであり、当時の国民国家やブルジョワ層の発展を前提とした枠組である。しかし、そのような前提は20世紀後半以降のグローバリゼーションの進展とともに崩壊してきており、そのような現代の状況のなかで、本論文の視点から、芸術の問題をどう捉え直すことができるのかが、重要な課題となるだろう。このことは、本論文の冒頭で問題意識として提示されているように、音楽の社会的貢献や地域活性化プロジェクトのようなかたちで、芸術音楽の存在価値が問いなおされているのはなぜか、という問題にも接続するものである。

以上のように、本論文には上記2点の課題の存在が認められるものの、それらの課題の解明は、むしろ学位申請者の今後の研究の発展に期すべきものであり、先述した、本論文の有する高い専門的・独創的価値そのものを減じるものではない。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成26年7月28日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 平成26年 10月 1日以降